

音楽詩劇・國府田達也 一人芝居

# 漱石の夢

「夢十夜」と「英詩」

Between Life and Dream.

生と夢のはざままで

Where Life meets Dream.

生が夢に出会うところに。

こんな夢を見た

2023年12月9日(土)・10日(日) 14時開演 鍔仙会能楽研修所

出演 國府田達也

吹きもの 設楽 瞬山  
打ちもの 橘 政愛  
構成・演出 笠井 賢一





音楽詩劇・國府田達也 一人芝居

# 漱石の夢 「夢十夜」と「英詩」

夏目漱石は1903年1月、2年のロンドン留学を終え帰朝した。ロンドンで強度の神経衰弱に陥り、漱石発狂せりという噂がたち、急遽帰国を命じられた。4月から一高と東京帝国大学の講師になる。一高生徒の藤村操が漱石に叱責された直後の5月、華厳滝に入水自殺。神経衰弱はさらに悪化、高浜虚子から病氣治療の創作を勧められ「吾輩は猫である」、「坊ちゃん」と発表、作家として方向性を見出す。帰国の年1903年11月に左記の英詩が書かれた。

1907年2月一切の教職を辞し、朝日新聞と契約し、職業作家として『虞美人草』を連載する。その翌年の7月〜8月『夢十夜』を連載する。

「こんな夢を見た」ではじまる、夏目漱石の夢を通して、あなたの秘められた世界が、あやういほどに透明に、不気味に、または残酷な滑稽さとともに能楽堂(夢の離れ屋)にたち現れる。國府田達也の練達の芝居と、和洋の吹きものもの自在な演奏と、あらゆるものを音にする打ちもの音により、漱石の夢の世界、人の記憶の深層に、夢幻の世界に誘う音楽劇。

「病気の時には自分が一歩現実の世を離れた気になる...そうして健康の時にはとても望めないのどかな春がその間から湧いて出る。この安らかな心が、即ちわが句であり、わが詩である」(思ひ出す事など)

Between Life and Dream. 生と夢のはざま  
Where Life meets Dream. 生が夢に出会うところに

こんな夢を見た

## [I called to the stars]

I called to the stars in my dream.  
The stars came out of the Night's bottom.  
I called to the wind in my dream.  
The wind came forcing the Gate of North.  
But alas!  
The stars were scattered by the wind.

Early in the morning I went into my garden  
And there I found three stars hung heavy  
On the slender stems of the snow-drop.  
I picked them up and put them in a vase, -  
Sweet remembrancer of last night's dream.

(November 27, 1903)

夢の中で星を呼んだ  
星は夜の底からやって来た  
夢の中で風を呼んだ  
風は北の門をおしあけてやって来た  
しかしああ  
星は風に散り散りにされてしまった

朝早く庭へ行った  
そこでマツユキソウの細いくきに  
重そうにぶらさがっている3つの星を見つけて  
ひろい上げてびんの中に入れた  
甘やかな 昨日の夜の夢

## [I looked at her]

I looked at her as she looked at me:  
We looked and stood a moment,  
Between Life and Dream.

We never met since :  
Yet oft I stand  
In the primrose path  
Where Life meets Dream.

Oh that Life could  
Melt into Dream,  
Instead of Dream  
Is constantly  
Chased away by Life! (November 27, 1903)

女が私を見るように私は女を見つめた  
瞬間たち止まり、見つめあった  
生と夢のはざままで

あれ以来私達は会っていない  
それでも私は立っている  
この甘美の道に  
生が夢に出会うところに

おおできることなら  
生が夢と融けあい  
いつでも夢が生から追いはらわれずに  
夢のなかにいられたら!

第一夜 私の目の前に横たわった女が「もう死にます」という。死んだら埋めて、墓の傍で百年待っていて下さい、きつと会いに来ますからと...

第二夜 「侍ならば悟れぬはずはなからう」と和尚に馬鹿にされた自分は、悟つて和尚の首を取るか、切腹するかの二択を自らに課し、力づくで「無だ」「無だ」と力むが...

第三夜 目が潰れて青坊主になった六歳の我子を背負つて歩いている。子供はまるで大人のような口を聞く。私は早くこの子供を捨てたいと森の中に急ぐ...

第六夜 運慶が護国寺で仁王を彫る姿を見ていた自分は、「運慶は木の中に埋まっている仁王を掘り出しているだけだ」と人が云うのを聞き、自分でも試してみるが...

第十夜 女の後をついて行った庄太郎は七日目に帰つてきて寝込んだ。女は庄太郎を絶壁まで連れて来て女は此処から飛び降りなければ、庄太郎の大嫌いな豚に鼻を舐められますよと女はいう...



國府田達也(こおだたつや) 神奈川県生まれ。桐朋学園芸術学部演劇学科、文学座養成所を経て菅原文太に弟子入り、三年半の修行のち独立。映画、舞台、TV、CM、ナレーションなどに多く出演している。演出家笠井賢との仕事に『古典原文平家物語』『古事記』等多数。来年8月15日に熊野本宮で世界遺産登録二十周年記念公演として『おぐりとして』を上演する。

2023年12月9日(土)・10日(日)  
14時開演(30分前開場)

【会場】 鏡仙会能楽研修所

T1070062  
東京都港区南青山4-21-29  
TEL 033401-2285

【料金】 4500円(全席自由)

【お問合せ・お申込み】

アトリエ花習

TEL 090-9676-3798

お申し込みフォーム  
アトリエ花習ホームページ

【主催】 一般社団法人アトリエ花習

